

批評と紹介

呉仁安 著

明清時期上海地区的著姓望族

山根 幸夫

本書は上海師範大学の呉仁安教授の十余年にわたる苦心の労作である。五、六年前のことになるが、明史国際學術討論会に参加した際、偶々分科会で呉教授と同席した。その時「日本で上海の望族について研究した論文はないか」との質問をうけた。勿論、日本にはそのような研究は存在しなかった。その後、呉教授より「明代上海地区的著姓望族」と題する原稿を送ってこられたので、『明代史研究』二四号（一九九六）に掲載した。

さて、本書は一九九七年秋、上海人民出版社より刊行、中国学界ではすこぶる好評を博した。十章より構成されており、その目次は左の如くである。

第一章 区域文化和姓氏家族史研究

第二章 明代以前上海地区著姓望族概述

第一節 上海地区的自然地理及其歷史沿革述略

第二節 明代以前上海地区的江東貴族与著姓大族

第三章 明代上海地区的望族

第一節 明初上海地区的著名家族

第二節 明代中後期上海地区的世家望族

第三節 明清鼎革易代之際上海地区世家望族的被

難和衰落

第四章 清代上海地区的望族

第一節 清初上海地区的著姓望族

第二節 清代中葉上海地区的新興望族

第三節 清代後期上海地区的世家望族

第五章 貫聯明清兩代的上海地区的望族

第一節 貫聯“明清兩代”的上海地区的望族

第二節 明清時期上海地区望族的特点

第三節 明清時期上海地区著姓望族盛衰消長成因

第六節 明清時期上海地区若干著姓望族家族史個案研究

選錄

第七節 明清時期上海地区譜牒及其相關資料的撰集・甄

別和考訂

第八章 明清時期上海地区部分家族（三百余家）門祚述

略（上）

批評と紹介 山根

第八十一卷 一三三

第九章 明清時期上海地区部分家族（三百余家）門祚述略（下）

第十章 附 録

* * * * *

従来中国では、ある特定地域の望族を研究したものに、潘光旦『明清兩代嘉興的望族』（商務印書館、一九四七）があるが、それから五〇年後に刊行された本書は、研究方法でも内容的にもはるかに優れたもので、豊富な成果を盛りこんでおり、著者の十余年にわたる研究実績がはつきりと示されている。なお、著者が「上海地区」と称するのは、清末までの松江府の区域のみでなく、現在の行政区画で上海特別市に含まれる宝山・嘉定・川沙・華亭・婁東・金山・奉賢・青浦・南匯・崇明の諸県まで対象としている。

著者は第一章で本書著述の意図を述べ、第二章では明代以前の上海地区の望族について概述している。具体的に、三国呉の陸遜、宋末元初の朱清、張瑄などが紹介されている。第三章では明代の上海望族について述べるが、まず従軍の武将が戎符を世襲して望族となった者、次に外地より上海で任官して此地に占籍した者、また前代からの碩学宿儒の家などを挙げている。要するに、朱元璋に新しく仕宣した家族だとする。次の中後期の望族には、江南社会経済の発展に伴なって、科挙に合格して有力になった者が多い

が、類型化すれば、務農耕読によって起家した者、工商業等を経営して有力になった者、文化世族、代々官僚の家、忠孝伝統儒家思想により出世した者などとなる。しかし、それらの望族が、明清交代の際に、難儀に遭遇し衰落した事實をも指摘する。

第四章では、清初の望族としては、満州軍に随って天下を平定した武将高官の新望族、世々儒を業としていた知識層が科挙を通じて出世した者、及び明代よりの望族の子孫の三つのパターンがあったという。清代中期になると、「素封起家」、あるいは「以資起家」する者が甚だ多かったという。清代後期になると、沙船の経営や航運業によって有力になった望族が多く、洋務や外交、実業によって抬頭した新興望族も現われたことを強調している。

第五章では、明清兩代にわたる上海の望族を考察しているが、まずその具体的なケースとして、奉賢県の陳氏、華亭県の王氏、上海県の陸氏、華亭県の張氏、崇明県の施氏の例を挙げる。そして多数の望族の中、ある門祚は非常に短く、三、四世で消亡するのは何故であろうかとの疑問を提起する。著者は比較的長く門祚のつづくものとして、文化世族、科挙・捐納・蔭襲などで官僚となった世族、および「人丁興盛」の望族を挙げている。「人丁興盛」というのは些か奇妙であるが、これは現実であろう。次に明清時

期の上海の望族の特徴として、(一)、この時期の新興望族の創始者には一般に、平民出身者が多かったこと、(二)、新興望族はほとんど科挙制度によって造りだされ、その創始者は科甲と密接に関連していること、の二点を強調する。最後に、この時期の望族の盛衰消長の原因を検討する。望族の興盛した要因として、(一)、賢明な母親の存在、孝行・義行などで名を著わしたこと、(二)、有力な姻戚の存在、(三)、意欲的な移住、の三点を挙げている。その他、家学が人才の育成に大きな影響を与えたらしい。家塾・社学・書院なども重要な役割を果たしたとする。最後に、望族の衰落した原因として、(一)、子孫の不肖、(二)、戦争破壊、(三)、政治の動乱と変動などを挙げている。

第六章では、明清期の上海の望族家族史のケース・スタディを試みている。即ち、上海の秦氏、二、上海の瞿氏、三、華亭の張氏、四、上海の陸深家族、五、華亭の張弼家族、六、華亭の徐階家族、七、上海の潘恩家族、八、青浦の陸樹声家族、九、上海の董其昌家族、十、上海の徐光啓家族、十一、金山の王広心家族、十二、上海の曹氏、十三、婁県の張照家族、十四、青浦の胡宝瑛家族、十五、婁県の呉廷揆家族、十六、宝山の印光任家族、十七、上海の趙文哲家族、十八、南匯の呉省欽家族、十九、嘉定の錢大昕家族、二十、上海の王世祿家族 以上二〇の家族について、

その一族の家族史を相当詳細に考察しているものもあり、系図を作成しているケースもある。右の如く、徐階家族、董其昌家族、としているのは、知名人を出した家族の場合で、然らざる場合は、秦氏、瞿氏の如く表記している。かなり詳細に述べている場合と、比較的簡単な叙述にとどまっている場合がある。

第七章では、家族史研究のために豊富な譜牒やその関係資料を搜集し、把握する必要があるが、家族史資料のいちじるしい特徴は、その零散性にあり、上海地区の望族史を例にとれば、過去の歴史資料中には家族史に関する完備した記録は存在しないことを指摘する。それ故、明清時期の上海の望族史を研究するために必要な資料は、家乗・年譜・宗譜・族譜などの譜牒資料と、それに関連する地方志、明清人物の筆記、文集類、およびその他の民俗学（風俗習慣・民間伝説・口碑文学）などの資料である。

特に、貴重な資料は譜牒類で、著者の述べるところによれば、上海図書館には一万部前後収蔵されており、その大部分は江蘇・安徽・江西などの地域の譜牒類である。著者は上海地区の望族史に関する史料を搜集するため、これらの譜牒を丹念に探索している。譜牒の他に重要な資料として、上述した地方志および筆記・文集がある。しかし、重要なことはこれらの資料を甄別、弁偽、考訂することであ

る。何故なら、譜牒資料中にはしばしば沾名釣誉の辞が見られ、甚しい場合には、純然たる偽作で、自己の先祖を誇る目的のために作られたものもあるからである。

著者は、そのような資料を甄別、考証、補正を試みた具體的な例を挙げる。まず、董其昌の家世と籍貫に関する考証を試みる。以下、施所蘊の武舉に合格した年代、林景暘と林有麟の父子関係、夏允彝の死事、夏完淳の死因などについて、具体的な考証を行ない、殊に譜牒類などの資料を甄別、考証することの重要性を証明している。

第八章、第九章では、明清時期の上海地区の三百余家の家族の門祚を略述している。略述とはいふものの、繁簡さまざまな叙述である。第八章には一四八の家族史を収め、第九章には一五七の家族史を収めている。この両章で本書全体の半分のスペースを占めている。著者がもつとも力を注ぎ、重点をおいたのは、当然この両章である。筆者が想像するのに、著者はこの両章にもつと多くのスペースを割きたかったのであろうが、出版のことも考えて、この程度に略述したのではないかと考える。

家族の配列方法については、同一県、あるいは同一姓氏順に並べるといった基準は適用していない。せめて県別に配列されておれば、もつと便利であつたかも知れない。この三〇五家族中、もつとも多いのは二三家の王氏で、つき

は二二家の張氏、以下、一六家の顧氏、一四家の李氏、十三家の朱氏、徐氏、楊氏、陳氏、一二家の陸氏、一家の沈氏という順序になる。上海地区では、これらの姓氏が比較的多いことがわかる。他方、一姓一家のみの家族もかなり見られる。

次に、各姓氏（五十音順）を県別に表示すれば左表の如くなる（筆者作成）。

この統計によつて、上海地区の望族の分布状況がほぼ理解できるよう、各県別の望族の家数を集計してみると、最多は宝山の四九家で、次は華亭の四二家、以下、南匯の三〇家、上海の二九家、金山の二七家、川沙・嘉定のそれぞれ二〇家、奉贤の一六家、婁島の四家、松江府の三家とづくわけである。なお、松江府としたのは、県名が明記されていない家族である。この数字によつて、望族の多数存在する県と、比較的少い県との差が推測できるわけである。その他、望族については各県内に限らず、他県との関係をも探究する必要がある。県を越えての望族の関係は、結婚を通じて拡がるのである。この通婚関係については、著者は論及していない。

要するに、著者は第八章、第九章において、三〇五家の望族の略史を述べるに止まつている。膨大な史料を搜集し、その真偽を検討、考証して、このような叙述をなしたこと

批評と紹介
山根

崇明	宝山	嘉定	青浦	上海	南匯	川沙	金山	奉賢	婁鼎	華亭	松江	県	姓
				1									郁
		1											殷
					1								于
								2					衛
	1		2					2					袁
1	2	2	3	4	4	2		1	1	3			王
1								2					何
					2								華
									1				夏
						1							艾
				1									霍
							1						歸
1										1			許
				2									喬
						1				1			姜
		1											龔
	2		1				1	1					金
			1										倪
							1						胡
1	1		2	1	4	2	1			4			顧
							1						吳
						1		1					高
	4	1					1						侯
			1										皇甫
4		1		1		2	1						黃
1						1							沙
0	10	6	10	10	11	10	7	9	2	9	0		計

崇明	宝山	嘉定	青浦	上海	南匯	川沙	金山	奉賢	婁鼎	華亭	松江	縣	姓
					1								蔡
5	2			1									施
		1											時
				1	6	1	2				3		朱
	1												須
	1	1				1	1	1			2		周
1						1							祝
		1	1								1		諸
1	4	3	1	1		1	1						徐
							1						莊
											1		章
							1						焦
					1								葉
											1		蔣
						1							鍾
	1												申
1	3		2	1		1	1		1	1			沈
	1	1											秦
											1		盛
					1								薛
1								1		3			錢
1	2							1					宋
					1								倉
			3				1						曹
		1							1	1			孫
	1												戴
					1								談
10	16	8	7	4	11	6	8	3	2	14	0		計

批評と紹介 山根

崇明	宝山	嘉定	青浦	上海	南匯	川沙	金山	奉賢	婁東	華亭	松江	県	姓
				1									鈕
			1	1									趙
1	3	4	2	5	1	1	1			3			張
1	3			1	2	1		2		3			陳
							3						程
				2	1								杜
			1	2	2	1				2			唐
					1								馬
										1			莫
	1			1							1		范
	2		1										潘
					1								閔
	1												符
					2								傅
										1			馮
					1								方
										1			包
								1					彭
											1		孟
			1							1			俞
							2						姚
3	3		1	1			3			2			楊
										1	1		雷
	6	1			2			1		4			李
	2		5	1	2	1	1						陸
1	2						1						劉
				1									凌
		1											廖
							1						林
6	23	6	12	16	15	4	12	4	0	19	3		計

は、まったく大変な労力を要したことは間違いない。しかし、望族史の研究をこれだけに止めず、更に詳細な分析を進めて、研究を推進されることを希望してやまない。著者が研究をこのままで中絶されるとすれば、残念の極みである。

第十章では、最初に清末・民初における著名な望族二四人の紹介をしている。やはり、上海出身者が多いが、若干の例を挙げれば、上海の徐潤（買弁資本家）、同じく鄭嘉榮（実業家）、陸徵祥（外交官）、曹汝霖、青浦の夏瑞芳（商務印書館創始者）、川沙の黄炎培（教育家）等が挙げられている。次には、明清以来の上海の望族の後裔が、現在どのような状態にあるかを紹介している。最後に、著者が本書を執筆するに当って利用した家乘・年譜・宗譜・族譜などの譜牒資料、およびそれと関連をもつ地方志、筆記・文集などの書目を附載している。また、現代の研究者の専著、論文をも紹介している。

附言すれば、著者が挙げた三〇五家の門祚の中、その門祚が三代の者は五一家、四代の者は九八家、五代の者は四八家、六代の者は三六家、七代の者は二三家、八代の者は一五家、九代の者は六家、一〇代の者は二家、一一代の者は一家、一二代の者は三家、一三代の者は二家、一五代・一六代の者は各一家、であったことを指摘している。右の数字を見れば四代つづいた者が九八家、次が三代の五一家

および五代の四八家であるから、平均的にみれば望族の存続する期間は三代乃至五代のものをもっとも多かったことがわかる。換言すれば、一〇代以上も続く望族はきわめて少いことがわかる。

著者が指摘するように、明清時期の上海地区の望族の地位は、完全に自己の才能と努力によって確立されるもので、その地位が長く継続した場合は、その子孫が代々相次いで、科擧資格を取得して、官僚の途を歩んだからであろう。ただし、子孫が代々科擧資格を取得することは容易でないから、前述したように、一〇代以上も継続する望族がきわめて少いのは当然のことである。

最初に述べたように、本書は呉仁安教授の大変な労作である。著者は本書を完成するために、膨大な譜牒類や地方志・筆記・文集類から多くの史料を搜集・検討されたわけである。そのために費した時間は測り知れないものがある。本書に採り入れられている史料の数倍、あるいは十数倍にのぼる史料に基づいて、本書を構成されたものと思われる。その結果が、このような興味ぶかい著書となったのである。著者が明清時期の上海地区の望族史の研究を更に進展されることを祈る。著者の今後の御健闘を期待してやまない。

（一九九七年九月、上海人民出版社、A五判、六四二頁）